

水曜通信29

東北学院宗教センター編

2023年
7月

第64回 水曜公開礼拝

2023年7月19日(水) 18:30-19:00



<礼拝次第>

前 奏：ジャン・ラングレー作曲

1.キリエへの前奏曲

《フレスコバルディを讀んで》より

讃美歌：39番 「ひくれてよものはくらく」

聖 書：ヨハネによる福音書 8章12節

讃美歌：326番 「ひかりにあゆめよ」

説 教：「わたしは世の光である」

頌 栄：541番 「ちちみこみたまの」

後 奏：J.S.バッハ作曲

「すべての人は死ななければならない」 BWV643



説教

前理事長・院長
松本 宣郎



奏楽

礼拝オルガニスト
大泉 真理

後奏の後、大泉 真理氏（礼拝オルガニスト）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第65回水曜公開礼拝は2023年9月20日です。

第63回 水曜公開礼拝報告（説教：原田 浩司、奏楽：今井 奈緒子）

2023年6月21日（水） 18：30 - 19：00

讃美歌：34番「いのちのたびじは」
聖書：ローマの信徒への手紙 7章20節～25節
讃美歌：249番「われつみどとの」
説教：「私の中に住んでいる罪」
頌栄：544番「あまつみたみも」



【説教要旨】

使徒パウロは、自然界が自然法則に従っているのと同じように、私たち人間は己の内に潜む罪の法則に従ってしまう現実に気付くよう勧めます。作家三浦綾子が記した小説『水点』には、病院を経営する医師辻口啓造と妻夏江の家庭内の人間模様が描かれます。この家に養子として引き取られたのが主人公の陽子。彼女は、殺人犯に殺された幼い娘ルリ子の身代わりに、この家に引き取られますが、そこには「裏」がありました。妻夏江の不貞を疑った辻口が、彼女への復讐として、ルリ子を殺した犯人の娘を、妻が何も知らずに育てる様子を観察するためでした。後に、妻夏江もその事実を知り、そして陽子も自らの出生を知り、ついには自殺を図りました。しかし、陽子は殺人者とは全く無関係でした。外からは裕福で幸福な家庭にしか見えませんが、その内側で生じた、凍り付くような愛憎劇、なんと救いのない惨めな人間の物語でしょう。罪の法則に仕える人間の物語は、私たちの物語です。罪の法則から私たちを解き放つため、イエスは救い主（キリスト）として来てくださいました。25節「私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝しましょ。』（宗教センター主任・大学宗教部長 原田 浩司）

前奏：J.L.クレブス作曲 コラール編曲「我らみな唯一の神を信ず」
後奏：J.S.バッハ作曲 コラール編曲「来たれ聖霊、主なる神」BWV652a

クレブスはバッハの優秀な弟子で、アルテンブルク城教会のオルガニストでした。長らくバッハの作と思われていたほどに、このコラール編曲「我らみな唯一なる神を信ず」は師の手法に倣い究めようとする秀作です。後奏はバッハによるペンテコステ（聖霊降臨）のコラール編曲で、後にライプツィヒ・コラールとして改訂、拡張されるヴァイマル時代の旧稿です。

（教養教育センター教授・大学オルガニスト 今井 奈緒子）



礼拝とその後19時00分から30分までの今井 奈緒子氏によるオルガンによる賛美に44名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏・奏楽：今井 奈緒子）

1. J.S.バッハ作曲 ノイマイスター・コラール集より「神のなしたもう御業はすべて善し」BWV1116
2. F.リスト作曲 「泣き、嘆き、悲しみ、おののき」による変奏曲

オルガン奏者ノイマイスターが編集したコラール編曲82曲のうち、バッハ作と考えられる作品群が19世紀後半から米国イェール大学に保管されていました。「神のなしたもう御業はすべて善し」もそのひとつです。19世紀「ピアノの貴公子」リストはその晩年に、かつてバッハも働いたヴァイマル宮廷で楽長を務めます。この作品はバッハのヴァイマル時代のカンタータ「泣き、嘆き、悲しみ、おののき」BWV12の通奏低音進行に＜ロ短調ミサ＞の合唱「十字架にかけられ」のモチーフを織り交ぜながら展開される壮大な変奏曲で、バッハへの敬意が窺えます。リストが長女を失った1862に作曲。カンタータBWV12の終曲と同様にこの曲も、最後は「神のなしたもう御業はすべて善し」のコラールに乗せて神への深い信頼を歌います。

（今井 奈緒子）



宣教師たちの生涯と思想（5）ヘンリー・K（ケラー）・ミラー先生の思想

『東北教会時報』第200号（大正7年1月3日発行）には、ミラー先生の日本での四半世紀にわたる働きを回顧した記事が掲載されています。元来、厳格な宗教的環境に育ったミラー先生は、来日直後には日本の多神教的宗教観と道徳観念の希薄さに対する反感を抱いていました。ミラー先生にとっては、当時の日本人は「打算的」すぎるように感じられたからです。そのため若い頃には、同労の日本人キリスト者とも衝突することもあったようです。しかし年を重ね、円熟していくにつれ、ミラー先生は、真理については、恐れず、譲歩することなく忠実に語るべきだとしつつも、「同労者に接する折には、互に快よく交わり、他人の意見を尊重すると、其友情は愈長保ちするのである」（原文ママ、ふりがなを付した）と記しています。「教える人」という印象の強い宣教師ですが、彼らもまた、日本での体験を通して学び、成長していったということが分かります。（大学宗教主任 藤野 雄大）



東北教会時報写真（東北学院大学図書館所蔵）

一 建築が語る東北学院の歴史（20）一

東北学院神学部卒の牧師建築家・羽生義三郎に関する続報です。

神学部別科を1917年に卒業した羽生は、地元の秋田に戻って伝道者としてのキャリアを開始します。秋田での活動は約2年。その後は岩手で10年（福岡、一戸）、さらに福島に移って5年ほど活動しています（猪苗代）。1934年には再び岩手に戻り（宮古教会）、ここを終生の拠点とします。

建築家としては、会堂や牧師館の設計、工事監督、あるいは建築委員としての関わりを確認できます。その活動範囲は青森を除く東北5県にまたがり、少なくとも東北地方において、他に類を見ない独特のキャリアだったことが分かります。新庄（1922頃）、秋田（1923頃）、石巻山城町（同）、一関（1929頃）、福島（牧師館：1929頃）、岩沼（1930頃）、喜多方（建築委員：1931頃）、宮古（年不詳）。彼の活動は、東北の教会史に刻まれています（続）。（工学部 崎山 俊雄）

| 年 | 歳 | 事項 |
|------------|----|---|
| 1889(明 22) | 1 | 生まれる（本籍：現秋田市） |
| 1917(大 06) | 29 | 東北学院神学部卒業（3月）・按手礼（4月26日） 大正 6.6- 同 8.3：秋田伝道教会で主任教役者を務める |
| 1919(大 08) | 31 | 大正 8-10 年頃：福岡伝道所（岩手県）で主任教役者を務める |
| 1922(大 11) | 34 | 日本基督教団新庄教会・同牧師館兼集会場（設計） 大正 11- 昭和 3 頃：一戸伝道所（岩手県）で主任教役者を務める 8月：秋田教会 着工（工事監督） |
| 1923(大 12) | 35 | 10月：新庄教会牧師館兼集会場 竣工（会堂建設は見送られる） 日本基督教団石巻山城町教会 竣工（工事監督か） |
| 1929(昭 04) | 41 | 日本基督教団一関教会 竣工（設計） 昭和 4-8 年頃：猪苗代伝道所（福島県）で教師試補を務める 日本基督教団福島教会牧師館 竣工（設計に関与か） |
| 1930(昭 05) | 42 | 日本基督教団岩沼教会 竣工（基本設計） |
| 1931(昭 06) | 43 | 昭和 6 年頃 日本基督教団喜多方教会（設計変更） |
| 1934(昭 09) | 46 | 昭和 9 年頃 宮古伝道教会（岩手県）で教師試補を務める |
| 1935(昭 10) | 47 | 10月：新庄教会 竣工（羽生の当初案が参照されたと見られる） |
| 1940(昭 15) | 52 | 宮古伝道教会で教師に任用される（4月18日） |
| 1951(昭 26) | 63 | 一級建築士登録（8月21日／登録番号：第 7896号） |
| 1961-1963 | 75 | 1961年6月～1963年5月の間に逝去したと見られる |

本表は『一級建築士名簿』（日本建築士会連合会編）、『秋田県立秋田工業学校一覽』（秋田県立秋田工業学校編）、『基督教年鑑』（日本基督教教会同盟ほか）、『東北学院同窓会名簿』（東北学院同窓会編）、『福島県の近代化遺産』（福島県教育委員会編）、各教会史、高橋恒夫（2000）、堀勇良（2021）等を基に崎山が作成した。

表：羽生義三郎略歴

第3回目、第4回目のTGCFの活動が行われました。

5月18日(木)の音楽礼拝は、「愛する人たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれたものであり神を知っているからです(1ヨハネ4:7)」の御言葉を中心に、学生による力強い証し、「愛をもって生きていこう」「山も海も越ええ」「いのちの光」のワーシップソングを共に讃美しました。礼拝後は、宣教師の方々も積極的に学生と関わって下さり、良き交わりの時となりました。



音楽礼拝：学生による証し

6月1日(木)のイングリッシュカフェ(国際交流)は、前回に続いて出席して下さった学生の方々を中心に、初めての学生の方々も賑やかな雰囲気の中で交わりを行うことができました。東北の魅力を英語で伝えるアイスブレイクでは、宣教師顔負けの力を学生の方々が発揮されました。また今回の自己紹介の時間では、名前等だけではなく、会の感想やユーモア溢れるコメントなども英語で飛び交い、積極的にコミュニケーションをとる姿も見られました。今後も、それぞれの良き賜物を分かちあえる場となることを願っています。

(宗教センター主事 佐藤 由子)



English Café：ゲームの様子

美術による賛美 (20) 西洋中世美術における滑稽

西洋中世では神が全て、人間は無。だから「芸術家」という観念はなく、ひたすら神の表象を模写する「職人」しかない。それが美術と芸術の出発点です。私たちに親しい「自己表現としての芸術」という芸術観は、近代の産物、19世紀ロマン主義の産物でしかありません。

しかし西洋中世の画家には自由裁量の余地はなかったのでしょうか？

この写本挿絵は、パリの国立図書館に所蔵されているので「パリ詩篇」と呼ばれている10世紀ビザンチンの超名作で、堅琴を弾くダビデを描いています。ダビデの後ろに居るのは「メロディ」の擬人像、右下の半裸の男は「ベツレヘムの山」の擬人像です。周りにはダビデが世話をしている羊や山羊がいます。そして真ん中の茶色の犬は聖書には書かれていませんが、確かに羊飼いに犬の助けは必要で、そこに犬はいたでしょう。その犬は、ベツレヘムの擬人像を睨んでうなづいています。犬には擬人像が見えてるようです。しかしそんなことが書かれているダビデのお話がかつてあったのでしょうか。



「堅琴を弾くダビデ」『パリ詩篇』Folio 1v 36x26cm, 10世紀、パリ、国立図書館蔵



あったかもしれません。しかし中世美術とは言っても、全てに典拠を探す必要はないです。画家はこんな風にちよっとなぞけて描いているのです。(史資料センター客員研究員 鐸木 道剛)



いのち

ひかり

あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE (いのち・ひかり・あい)

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第29号

2023年7月5日発行

〒984-8588 仙台市若林区清水路3-1

発行責任者：宗教センター主任 原田 浩司

東北学院宗教センター TEL：022-354-8310

Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp